

臨床検査部

1. スタッフ（平成27年4月1日現在）

部長（教授）	谷口 信行
副部長（教授）	山田 俊幸
副部長（准教授）	紺野 啓
医員（准教授）	小谷 和彦
	（講師） 鯉淵 晴美
	（助教） 宮本 恭子
病院助教	中澤 晶子
	（女性医師支援制度利用）
病院助教	去川 睦子
	（女性医師支援制度利用）
シニアレジデント	1名
技師長（技師）	橋本 好一
副技師長（技師）	筑後 史子
	宮澤 義
	日高 裕介
	高浪 勝利
技師配置：検体・生理検査	77名
検診センター	4名
不妊センター	2名
とちぎ子ども医療センター	7名

2. 臨床検査部の特徴

自治医大附属病院の特徴は、自治医科大学の建学の理念を実現するために、地域の診療に従事する医師を養成する臨床の場としての役割を担う点である。一方、地域の高度な医療施設としての役割も果たしている。従って、臨床検査部門は、臨床検査医学と一体になり、自治医科大学付属病院が質の高い医療レベルを維持・遂行するために貢献することを使命としている。臨床検査部は、昭和49年4月以来約40年間にわたって活動してきたが、病院のリニューアルに伴い、平成17年度には検体部門が、平成19年度中には生理機能部門が、機能的に連携を図る意味で、旧手術室跡地に隣接した場所に移転した。

検体検査部門の業務は採血収集、一般、血液、臨床化学、血清、遺伝子、細菌などに分けられ、生理機能検査部門は循環器、脳神経、呼吸器、超音波に分けられる。また、新棟や子ども医療センターにはサテライトの検査室があり、各々に技師を配置し検査を行っている。

その一方で、さいたま医療センターとの連携を積極的に図るため、部長・技師長による連絡会議を2ヶ月に1度開催し、両病院の情報の共有に努めるとともに、技師の人事交流を継続している。

臨床検査部門で行っている専門医の研修は、臨床検査

医学会認定の臨床検査専門医、超音波医学会認定の超音波専門医であり、複数の臨床検査部医師は両学会の専門医を取得し、若い医師を指導している。また、超音波医学会が行う臨床検査技師の超音波検査士の施設認定も取得しており、現在8名の超音波検査士が認定されている。また、超音波専門医、認定超音波検査士が医師、技師の育成にあたっている。

・認定施設

日本臨床検査医学会認定研修施設
日本超音波医学会認定研修指定施設

・認定医

日本臨床検査医学会認定専門医 山田 俊幸 他3名
日本超音波医学会認定専門医 谷口 信行 他4名

3. 実績・クリニカルインディケーター

1) 診療実績

臨床検査部の診療は、検体検査部門と生理機能検査部門の2部門に分けられる。検体検査は、尿、血液などの分析により、血液尿一般、化学、血清、免疫、遺伝子などの検査を行う。生理機能検査は、心電図、脳波・筋電図、呼吸機能、超音波検査、脈波検査などにより、直接患者の病態を把握するものである。

平成26年の1年間では入院、外来の検体検査、生理機能検査を合計して、およそ648万件の検査を行った。新たな検査の導入は、これまで設置されていた臨床検査運営委員会に代わり、平成20年度に発展的に改組した臨床検査運営委員会で検討し、そこで承認を受けたものを採用している。臨床検査部は、本館1階の検査部門に加え、新棟のサテライト検査室、とちぎ子ども医療センター、健診センターの検査室、不妊治療部、耳鼻科外来などでも行っており、各所で臨床検査技師が活躍している。採血は平成24年より1階の検査室の1箇所で行っている。学生実習では、4年生のBSLにおいて、病院検査の説明、検体の準備などについては医師だけでなく検査技師によるサポートも行われている。臨床検査部の医師は、それぞれの専門分野で活躍するとともに、各科の医師と連絡を取りながら、検査を円滑に行うためにアドバイスをを行っている。新たな検査法の導入、開発はもちろんのこと、学生や研修医教育にも積極的に関わり、検査法の改善、精度管理を行うことで、最新の検査室活動を進めている。臨床検査部をローテートする研修医は常時2-3名程度おり、その多くは超音波検査の研修をおこなっている。検査の中で、免疫電気泳動、骨髄像、超音

波診断、肺機能検査、負荷心電図、ホルター心電図、脳波や筋電図の実施判読などの高度な判断が必要な検査については、検査部に関連する専門の医師が直接、検査の実施や報告書の作成を行っている。また、検査部の医師は、臨床検査運営委員会、院内感染対策委員会、HIV感染対策委員会、ICT、MRSA委員会、安全対策委員会、医療機器委員会などの多くの院内委員会において活躍している。検査部の技師は、病院の検査の精度管理の一環として、栃木県の精度管理委員会での中心的役割をはたしている。また、細菌検査室の技師は、院内の感染症関連の部門に結果を連絡するとともに、その委員としても参加している。

なお、本院職員に臨床検査の情報を伝え、連絡事項などを迅速に連絡するため毎月「ラボニュース」を発刊している。

血は、検査結果を早期に依頼医師に返し診療を円滑に行うためのものである。

精度管理は臨床検査にとって最も根幹になるもので、今後も配慮してゆきたい。さらに大学の付属病院であることを考慮し、今後とも、病院内部での検査実施に重点をおきながら、信頼される検査部をめざしている。外部精度管理は、これまでと同様CAP、日本医師会、日本臨床検査技師会、栃木県などで行う。

内部の研修事業として、検査データの判読、エコーカンファレンス、文献紹介などを行う。

2) 臨床検査部 (2014.1~2014.12)

	区分	入院	外来	合計
検体検査	一般	138,728	241,304	380,032
	血液検査	474,843	466,547	941,390
	血清検査	97,244	326,352	423,596
	採血室 (尿素呼気試験)	8	603	611
	生化学検査	1,653,848	2,879,083	4,532,931
	遺伝子検査	757	3,806	4,563
	細菌検査	87,203	43,088	130,291
	合計	2,452,631	3,960,783	6,413,414
生理機能検査	循環器検査	23,192	9,922	33,114
	脳神経系検査	1,776	1,735	3,511
	超音波検査	4,298	9,949	14,247
	肺機能検査	2,599	12,040	14,639
	合計	31,865	33,646	65,511
総合計	2,484,496	3,994,429	6,478,925	

3) 先進医療の実績

遺伝子検査は、PCRの導入後その需要は増加し、結核、MRSAなどの感染症に対応した検査施設として構築中である。超音波検査は、日本でも代表的施設となっており、超音波の臨床的有用性に関する研究、音響組織特性に関する研究、超音波造影剤を用いた研究、超音波ドプラ法の新たな利用法、探触子と感染症媒介の可能性、末梢血管の硬さについての研究をおこなっている。

4. 事業計画. 来年の目標等

最近の診療報酬の見直しにより、既存の臨床検査項目の点数の再検討が行われている。これには、検査法の見直し、検体検査管理料加算のような新たな加算の導入を取り入れること、加えて試薬の効率的運用などの経営努力により対応しており、今後も努力を続けてゆく。また、平成25年度より行っている午前7時30分からの採